ニーチェ「日は沈む」

河内信弘

1

詩人としてのニーチェを，思想家としてのニーチェから切り離して，詩人としてのみ論ずることは困難であろう。一方，詩人としてのニーチェを切り捨ててしまうなら，思想家としてのニーチェ理解には大切なものが欠落する。

詩人として論ずることが困難な理由の一つは，ニーチェ自身が自分の詩を，思想的著作とはまったく切り離して，自立した世界として構築し，その成果としての独立した詩集を纏めようとはしなかったことにもあると思われる。

少年期から青年期にかけて詩作は実に豊富であり，音楽とともに詩はニーチェにとって重要な位置を占めていたけれど，後に彼は詩を仕事の中心におくことはなかった。

これはニーチェが本来の意味で自覚的に自己と相対するようになってから，詩，あるいは詩人をどのようなものと考えたかということに深くかかわりがある。

さてここで扱う「日は沈む」„Die Sonne sinkt“ は『ディオニュソス酔歌』„Dionysos Dithyramben“ のなかに登場する。この詩集はニーチェ最晩年の，狂気の闇に落ちる直前のものであり，ニーチェによって独立した詩集として編まれたものである。しかしながら，収められた各編をみれば，„Die Sonne sinkt“ を除くと，『ツァラトゥストラ』のなかのものであったり，エピローグとして他の著作にそえられたものであったりする。この詩集は，本来独立し，自立した詩の世界を構築したものが集められたものとは，やはり言いがたい。

つまり，思索の結果としての言わば散文のなかに，詩が挿入されたり，後歌（Nachgesang），前奏曲（Vorspiel），間奏曲（Intermezzo）として付け加えられたりするところに，ニーチェにとっての詩の意味が示されているとも見ることができるであろう。

それは思想に彩りを添えるものでなく，いわば，思索すること，思想すること，詩作することは根源において，一に変わることがなかったことを意味していると考えるべきである。

古代ギリシャにおける悲劇の成立を論じている『悲劇の誕生』に，後年加えられた「自己批判の試み」に，

「この新しい魂は歌うべきであった，——語るべきではなかったのだ。あのころ，語らなければならなかったことを，たぶん歌えば歌えたのであろうから，詩人として思い切って歌わなかったことは残念なことであった。」(KSt. Bd. 1, S. 15)

と記すが，文献学の論文として，また芸術論としても後に高く評価されるに至ったものを，歌うべきであったと回想しているのである。

詩は，つまり，歌うことはニーチェにとって最も深い根源的なものと言える。またそれを表現し伝えるという問題においても，ニーチェが考えていたことは単純なことではなかった。

『悲劇の誕生』を語る（reden）のではなく，歌う（singen）べきであったというが，それは何を意味するのであろうか。

「当時あらゆる点であれほど独自な見解と冒険を，やはり独自な言語であえて言う勇気（あるいは不遜）をまだ持たなかったことである」(KSt. Bd. 1, S. 19)

とニーチェは言う。そこに歌うという意味のひとつが示されているであろう。ただし，「独自な言語」というのも，単に個性的言語という程度の意味ではなく，また単なるそれまでの歴史的な言語意識の延長上で考えられてはならない。

「哲学的に思考にたいしては，それは生の哲学，実存哲学の方向へカーブを切らすことになり，広義においてそれを芸術化したのであるが，芸術にたいしては，それが精神活動において最枢要の位置を占るという自覚を強化したのである。そのさい芸術においては哲学のばあいと逆の影響がおこった。つまり，芸術が本来生命燃焼的であるからといって，それを旧のままに安住させるのではなかった」[1]

と指摘されるが，そのような見方でニーチェを見なければならない。

ニーチェ自身の言葉で言えば，「学問を芸術家の視点で，さらに芸術を生の視点で見る」—die Wissenschaft unter der Optik des Künstlers zu sehen, die Kunst unter der des Lebens—(KSt. Bd. 1, S. 14) ということになるであろうか。ニーチェにとって詩と散文は，芸術と哲学的思考はその根底において生に連なり，一なるものである，と考えられるのである。

しかし，哲学的思考，つまり真理を思想することの，あるいは考えるということの根本的な問題が「われわれは言語形式によってしか思考しない」というところに突き当たる。言語はものそのものを表現し得ないことをニーチェははやくからその意識に乗せている。

長いヨーロッパの歴史を見ると，言語によって別の世界が構築され，保持されて来たのであった[2]。ニーチェの言う独自の言語とは，今まで使われていた言語からそのような要素を捨て去りそして使わなければならない言語と考えなければならない。

2

ニーチェの言う詩，あるいは詩人の問題を，„Dionysos-Dithyramben“ の冒頭の詩，„Nur Narr! Nur Dichter!“ に即しながらもっと具体的に考えてみよう。

“Der Wahrheit Freier-du? so höhnten sie
nein! nur ein Dichter!
ein Thier, ein listiges, raubendes, schleichendes,
das lügen muss,
das wissentlich, willentlich lügen muss,
nach Beute lüstern,
bunt verlarvt,
sich selbst zur Larve,
sich selbst zur Beute
das-der Wahrheit Freier?...
Nur Narr! Nur Dichter!
Nur Buntes redend,
aus Naarenlarven bunt herausredendk,
herumsteigend auf lügerischen Wortbrücken,
auf Lügen-Regenbogen
zwischen falschen Himmeln
herumschweigend, herumschleichend—
nur Narr! nur Dichter!... (KSt. Bd. 6, S. 377-378)

「真理の求婚者だって—おまえが」そいつはそう嘲笑ったものだ。
いいや，たかが詩人さ。
獣さ，ずるがしこくて，獰猛で，忍んで歩く獣さ，
嘘をつかなければならない，
知っていながら，百も承知で嘘をつかなければならない，
獲物ほしさに，
仮面をいろいろかぶり，
自分の顔も仮面とし，

自分を獲物にするほかない一匹の獣さ，
こいつが真理の求婚者だって…
たかが道化さ。たかが詩人さ。
さまざまのことをいろとりどりに話しながら，
道化の仮面の裏からしゃべり散らしながら，
でまかせの言葉の橋の上をあちらこちらと，
みせかけの天から天にとかかった
嘘の虹の橋の上を
あちらに迷い，こちらに惑い，あちらこちらと忍び歩いて—
たかが道化，たかが詩人さ…

かつて『悲劇の誕生』において，ニーチェは叙情詩人を「ディオニュソス的芸術家として，根源的一者（Ureine）と，そしてその苦痛と矛盾と完全に一つとなり，叙情詩人としての私は存在の深遠から響きでてくる」（KSt. Bd. 1, S. 44）と言った。それは叙情詩に，あるいは叙情詩という言語に人間の存在の根本を見いだし得るという確信，あるいは見いだせるであろうとする願望であったと言える。

叙情詩人としての私に深い信頼と願望を託す一方で，また，その叙情詩人も使うほかない言葉について，「名称とものは一致するであろうか，言葉はあらゆる実在の妥当な表現であろうか」と問い，「語とはなにか，音で表された神経刺激の複写である」と言い，「われわれは樹木とか，色彩とか，雪とか，花とかについて語るとき，そうしたものについてなにごとか知っていると信じているけれど，われわれの所有しているものは，根源的本質とはまったく一致しない，事物の隠喩メタファー以外のなにものでもない」（KSt. Bd. 1, S. 879）と言い切っている。

そして，後に『ツァラトゥストラ』の中では，

「出てこい，深淵の思想よ，わたしの深みから……ありがたい，お前がくる，お前の声がする。わたしの深淵が語る。わたしの最も深きものにわたしは光りを当てたのだ。ありがたい。さあ来い。手を伸ばせ。あ！　吐き気　吐き気が，吐き気がする。かなしいかな」（KSt. Bd. 4, S. 271）

と言葉としてあらわれでようとする「わたしの最も深いもの」が言葉にならない事が示される。あるいは言葉になりつつも，それをそのままに受け取ることへの嫌悪をつまり吐き気という形で見いだせるのである。

「真理の求婚者」であることを否定しながら，さらにニーチェは，自分自身を「道化師に過ぎない，詩人に過ぎない」と自虐を込めながら歌い，道化と詩人を同格に置かざるをえないことはニーチェの言語意識と深くかかわっている。さらに「嘘の言葉の懸け橋」，「嘘の虹」などと言わ

なければならないことも。

ニーチェの言語不信は矛盾を抱えつつ，極めて深いものと言わなければならない。

ニーチェは思想を語る代わりに，つまり，真理の求婚者として受け入れられ，真理を語るものとしてはなく，詩として受け取り，詩としてしか歌うほかないものとして，詩人であり，しかし，道化となんら変わらないものとして，自分を考えるほかなかったのである。道化であり，詩人と言わなければならない苦渋である。

ゲーテの「一切の移ろうものはただ比喩に過ぎない」を逆転して「いっさいの不滅のものは一つの比喩にすぎない。詩人は嘘をつき過ぎる」(KSt. Bd. 3, S. 639) とも言う。

道化に過ぎないという苦渋は，かつて存在の深淵から (aus dem Abgrunde des Seins) と言えたのにたいして，この詩の圏内からは，わたしの深みから (aus meiner Tiefe) となり，存在の深みからとしての言葉をそのまま聞き取り得ず，自己の中から聞き取りえるかに見えても，吐気と苦渋とを伴っている。

ein Tier.....
das lügen muss
das wissentlich und willendlich lügen muss
.....
　　auf lügnerischen Wortbrücken
auf Lügen-Regenbogen
zwischen falschen Himmeln

嘘をつかなければならない (lügen müssen)，と言い，嘘の言葉の懸け橋 (auf lügnerischen Wortbrücken) とニーチェは言わなければならなかった。

それでは真の言葉の懸け橋とは，存在の深みからの言葉とはなにを意味し，実際に存在したのか，あるいはまた存在するのだろうか。こう問いなおしてみれば，そこに「太初に言あり，言は神とともにあり，言は神なりき。この言は太初に神とともににあり，万の物これによりて成り，成りたる物に一つとしてこれによらで成りたるはなし。これに生命あり，この生命は人の光なりき。光りは暗黒に照る，しかし暗黒はこれを悟らざりき。」(『聖書』(世界古典文学全集5) 筑摩書房，昭和41年，木下順治訳にしたがう) の重み，「言葉つまりロゴスありき」に支えられた歴史を考えないわけにはいかない。

それは同時に言葉によってあらゆるものが創造されたという神話，言葉こそ，真理であり，揺るがせない神として理解された歴史，その受容と，歴史を通しての深化，そして時間そのものが逆にそれらを露にして行く歴史を考えないわけにはいかない。

無神論は19世紀には，ほぼ白明の出発点であったが，それは，すでに，ニーチェのころには長くヨーロッパを支えたキリスト教精神の柱の一つである言葉，ロゴスについて変化が現れていたことを示し，キリスト教の言語観の上にもはや単純に立脚しえない事実を示している。その事実を『偽りの言葉の橋のうえに』の表現に見いだすことができるに違いない。また先に述べた「名称とものは一致するか」の問と答えも，この問題を抜きにしては考えられない。

近代ヨーロッパにあってはもはや言葉への基盤は失われて，詩人は詩を詩として歌う自由を得たとも言えるが，失った空虚感に苦しみ，苦渋に満ちた生き方を迫られたと言ってよいであろう。言葉はその根拠を失い，詩人がよって立たなければならない言葉への根本的な信頼は失なわれ，詩人は詩人として自立し，言葉の意味を問いつつ道をさがさなければならなかった。

神を取り戻そうとする試みがあり，神からの自立の道を進もうとする試みがあった。時代は人間に深い虚無を与えたのであった。言葉への信頼をもはや持ちえなかったニーチェは，それでもかつての言葉の基盤の上に立った言語を使うほかはなかった。それ以外の道はないのであり，かつての基盤のうえに立てないにもかかわらず，立たなければならない事実こそ，真理を求め，つまり真理に求婚するものもが，かつてあり得たようにはあり得ないことを示すと同時に，詩人が，同時に笑われるべき対象の道化となるほかはないことを示しているのである。詩人と道化が同一のものとし自己の中に存在していることを自覚的に自虐を込めて歌うほかはなかったと言えよう。

ニーチェが「独自の言語で歌う勇気（不遜）がなかった」とかつての自分を振り返り言うところの意味もそこにも見い出さなければならない。

3

„Die Sonne sinkt“ は『ディオニュソス酔歌』においてはじめて登場した詩であり，内容的にも自立したニーチェの絶唱と評価されているものである。

「今，その生涯の日を終わろうとする夕方に，ニーチェは―聖書の天地創造の余韻を残し―ツァラトゥストラにとって第七日の夕としてあらわれたものを経験した。」[3]

あるいは

「ディオニュソス酔歌のなかに―欠乏と無力から詩として開花する言葉の魔法の圏内での，おそらく最も純粋な詩『日が沈む』のなかにタンタロス的苦痛の戦慄が認められる。」[4]と評せられているものである。

あるいはまた，

「ニーチェの表面に幻惑される人は，そのほとんど病理学的な高ぶりに押し流されて，彼の深層の志向を見落とす危険があると思う。……彼の再晩年の詩『ディオニュソス頌歌』は，

『第七の孤独』うらにある作者の独白であるが，社会的に『鉄石の沈黙』に取り囲まれて，『死のような静かなざわめき』を感じ取っている作者の内面の風景が見事に造形されている。たとえばそこに——

あたりには，ただ，波と戯れ。
いまわたしの小船は　なすこともなく休む。
　望みも願いも　溺れ沈んで
　海と心は　今はなめらかに凪いでいる

という，人間の行く着く最高の境地が歌われている。」[5]

と評せられているものである。

ここではこの「日は沈む」をすこし詳しく読んでみたい。

Wolfram Groddeck „Nietzsches Gedicht: Die Sonne sinkt" の論文をもとにしつつ私の見解をも加えながら述べるものである。原詩をあげ，拙訳を添える。

Die Sonne sinkt.

1.

Nicht lange durstest du noch, 1
　verbranntes Herz!
Verheissung ist in der Luft,
aus unbekannten Mündern bläst mich's an
　—die grosse Kühle kommt... 5

Meine Sonne stand heiss über mir im Mittage:
seid mir gegrüsst, dass ihr kommt
　ihr plötzlichen Winde
ihr kühlen Geister des Nachmittags!

Die Luft geht fremd und rein. 10
Schielt nicht mit schiefem
　Verführeblick
die Nacht mich an?...
Bleib stark, mein tapfres Herz!

Frag nicht: warum?— 15

2.

Tag meines Lebens!
die Sonne sinkt.
Schon steht die glatte
  Fluth vergüldert.
Warm sthmet der Fels: 20
  schief wohl zu Mittag
das Glück auf ihm seinen Mittagsschlaf?
  In grünen Lichtern
spielt Glück noch der braune Abgrund herauf.

Tag meines Lebens! 25
gen Abend gehts!
Schon glüht dein Auge
  halbgebrochen,
schon quilt deines Thaus
  Thränengeträufel, 30
schon läuft still über weisse Meere
deiner Liebe Purpur,
deiner letzte zögernde Seligkeit...

3.

Heiterkeit, güldene, komme!
  du des Todes 35
heimlichster süssester Vorgenuss!
—Lief ich zu rasch meines Wegs?
Jetzt erst, wo der Fuss müde ward,
  holt dein Blick mich noch ein.
  holt dein G l ü c k mich noch ein. 40

Rings nur Welle und Spiel.

Was je schwer war,
sank in blaue Vergessenheit,
müssig steht nun mein Kahn.
Sturm und Fahrt—wie verlernt er das! 45
Wunsch und Hoffen ertrank,
glatt liegt Seele und Meer.

Siebente Einsamkeit!
Nie empfand ich
näher mir süsse Sicherheit, 50
wärmer der Sonne Blick.
—Glüht nicht das Eis meiner Gipfel noch?
Silbern, leicht, ein Fisch
schwimmt nun mein Nachen hinaus... (KSt. Bd. 6, S. 395～397)

日は沈む

1

おまえの渇きももうあとわずか,
焼けただれたこころ！
前触れが空気のなかにある
見知らない人々の口からわたしに伝えられる
—すばらしい涼しさがくるよ…

真昼，わたしの残酷な太陽は，頭のうえでじりじり燃えていた。
うれしいな，すばらしい涼しさがくる
おまえたちの不意の風
午後の涼しい霊たちが。

風が変わり，澄んできた。
誘うのか？ いかがわし
おんなの目で
夜はわたしを誘うのか？…

揺れるなよ，わたしの強いこころよ
考えるな，なぜだろう？　と—

2

わたしの生の日！
日が沈ずもうとしている。
すでに潮は満ちて波ひとつなく
　金色に輝いている。
あたたく岩は息づき，
真昼には，おそらく
幸福がその岩のうえで昼寝を楽しんだことだろう。
　みどりいろの光のなかで
蔦いろの淵はまだその幸せを歌っている。

わたしの生い日！
夕べが近い！
すでにおまえの目は
　なかば曇り，
すでにおまえの涙が
　露となって落ち，
すでに静かに白い海の上を
おまえの愛の深紅の色が走っている，
最後の無上の幸せがためらいながら…

3

晴れやかさ，金色の晴れやかさよ，来い！
　おまえ，死の
このうえなく秘めやかな，甘い前兆よ！
—あまりにも速くわたしは自分の道を走り終えたのだろうか？
いま，ようやく足が疲れたときに
　おまえのまなざしがわたしを捕らえ，
　おまえの幸せが追いついてくる。

あたりにはただ波と戯れ。
　そのむかし，重かったものが，
青い忘却のなかに沈み
　いまは，あてもなくわたしの小舟が浮かんでいる。
嵐も航海も—小舟は忘れてしまった！
　希望も期待も溺れて
　滑らかに心も海も凪いでいる。

第七の孤独よ！
　甘い確かさをこんなに近く
感じたことはなかった，
これほどあたたかく太陽のまなざしを。
—わたしの頂の氷雪はまだ赤く燃えているだろうか？
　銀色に光って，軽やかに，一匹の魚
　わたしの小舟がいまでていく…

詩のタイトルである „Die Sonne sinkt“ は第4節17行目がそのまま使われている。その内容は日が昇り，それから沈む，いわば上昇から下降の意味をもつのであるが，母音 i-o-e-i の連なりは高い音から始まり，下がり，高い音にまた上昇していく。内容と詩的構成とが逆の方向をもっている。このような遊戯がこの詩に見い出せるのだが，それがこのタイトルに象徴的に見いだされるのである。

1.　第1節を内容的な面から見ると，『ディオニュソス酔歌』の冒頭の詩「たかが道化さ，たかが詩人さ」„Nur Narr! Nur Dichter!“ の最後に呼応する。

Von Einer Wahrheit
verbrannt und durstig
—gedenkst du noch, gedenkst du, heisses Herz,
wie da du durstetest?—
dass ich verbrannte sei
von aller Wahrheit!
Nur Narr! Nur Dichter!...　(KSt. Bd. 6, S. 380)

ひとつの真理に
焼かれて，渇き，沈んでいったものだった，
—まだ思い出せるか，熱い心よ，おまえは思い出せるか，
どれほど，あのころ，渇き切っていたかを—
あらゆる真理から
追放されていたならばと思っていたことを。
たかが道化さ。たかが詩人さ。

これを受けて，Nicht lange durstest du noch（おまえの渇きもあともうわずかだ）と詩は始まる。

この「日は沈む」は『ディオニュソス酔歌』に初めて登場し，独立した詩と言えるのだが，やはりこのように他の詩と響き合いながら歌われている。

Verheißung は das Land der Verheißung（創世記のカナン約束の地，乳と蜜の流れる地）を連想させる。しかし，その噴き出てくる Münder（口）が複数であり，unbekannt（知られていない）という形容詞によって修飾されている。verbranntes Herz（焼けただれた心）は癒されるときも間近と思われるが，なにが癒すのかと言えば，それは unbekannt のままなのである。

Sonne に相対するもの，つまり26行目の Abend であることは分かるが，詩の流れのなかの今としては unbekannt のままというほかないであろう。

第2節の meine Sonne であるが，この人称代名詞 mein は，2行目の Herz を考えれば，本来 Herz にかかるべきものと思われ，Sonne＝Herz＝Dichter＝du＝ich なると言えよう。

Nur Narr! Nur Dichter! の wie da du durstetest?（あのころいかに渇いていた）かを受けている。

この1，2節がこの詩の言わば前提となる。

第3節の Die Luft geht fremd und rein. の一行は興味深い。

die Luft は5行目 die grosse Kühl の説明と言えようが，kommen は gehen と反対の概念を示している動詞が使われている。これでパラドックスであるけれど，バランスを保っているとも言える。

Es geht eine fremde und reine Luft. つまり fremd と rein は形容詞として Luft にかかるとも思われる一方で，fremdgehen（不倫をする）の意味である分離動詞とも見ることができる。しかし，その内容は rein（純粋な）であると否定されているとも言える。

これを受けて Verführerblick（誘惑の眼差し，流し目）という表現が意味と関連をもってくる。

schielende Verführerin（流し目を送る誘惑者），つまり Nacht は擬人化される。名詞が性を持つことが十分に使われる。Nacht は女性名詞なのである。

schielen（流し目をおくる），schief（うさんくさい）によって Verheißung はいかがわしい，偽りのものとみとめられる。

ただ fremd が unbekannt の意味をもつことを知るとき，若き日の „Dem unbekannten Gott“（知られざる神に）が思い起こされ，ニーチェが本当にキリスト教を離れたのか，それとも最もキリスト教的なるがゆえに，fremdgehen（浮気をする，不倫をする）と自分のこころを述べたのか，浮かんだ感想を浮かんだままに述べておきたい誘惑を感ずる。

Nacht は死を，Sonne は生をあらわし対立概念として示される。warum？（なぜ）には verheißung と思われたものが，Nacht（＝Tod）のいかがわし，物欲しげな Verführerblick であるのか，に対するものと，この詩の中心たる Die Sonne sinkt＝warum sinkt die Sonne？（なぜ日は沈むのか，生は滅びるのか）に向けられているとも見える。

2. 第4節に入ると，1節であらわれた名詞の性を使った表現の遊戯が，自己の人生への思いと，自然の夕べとが重なりながら，静まりを見せてくる。

Tag meines Lebens!

die Sonne sinkt.

女性名詞 Sonne も6行目において所有代名詞 mein がつけられ，主観があらわであったが，それも定冠詞になっている。自然の夕べが自己の前に展開され，そこに自己を映し，重ねて行く変化と見ることができるであろう。

なめらかな潮は金色に染まり，岩は暖かく息づく。Fels が伝統的な Tugend のアレゴリーであり，毅然とした Herz をしめすことを考え合わせると，自然の情景と認識とが重なり，荒れた自己への認識の静まりが詩に現れてくる。

これからは語の基本的理解をもちつつ，詩の流れに身をゆだねるようにして読んでいくことができるようにおもわれる。別の見方をするならば，これまでは日本語に移し変えることは不可能というほかない言葉の遊戯が隠されている。

22行目 das Glück は die Sonne を指すであろう。5行目，すばらしい涼しさがやってくる，に対応するであろう。der braune Abgrund の braun は Nacht を形容すると思われるから Nacht の比喩的表現。昼は夜のうえに遊ぶ。

第5節27行目，deine Auge は Sonne にたいする文学的表現として認められている。一つの目，二つの目，三つ以上の目は異なったイメージ，象徴であるが，この場合は単数であり，単数の場合は神の全知を，また太陽の残酷非情な面を表す怪物や巨人を暗示する[6]。

halbgebrochen は非日常的感覚を与え，半ば曇るとはエロティックな恍惚感をも示し，mit schiefem verführerblick 夜の流し目，がふたたび呼び起こされる，と言える。

この節には weiß 白い，Purpur 深紅という色彩が使われているが，weiß は純潔，さらに死

の象徴でもあり，Purpur は pur（＝rein，まじりけのない，純粋な）を重ねたものとも見ることができる。

braun（Z. 24）は weiß（z. 31）の反意語，grün（z. 23）は Purpur（z. 32）と補い合う関係にあり，希望の色だが嫉妬の色でもある。

3. 第6節，Heiterkeit は Vollkommenheit（完全）を意味する。heimlichster süssester Vorgenuss（極めて秘めやかな甘い享楽）はこの詩に現われたエロティックな要素の最後といってもよいであろう。

dein Blick, dein Glück は死のまなざし，死の幸福を意味し，ニーチェが死の眼差しを感じ取り，受け入れたことを意味するであろう。しかし，その官能的受容と，観念的受容とが溶け合っていることが，Heiterkeit に見いだすことができよう。

思想に駆り立てられ，知られざるもの unbekannter Gott に追いたてられる疲労は死によって，あるいは死によってしか報われないのかもしれない，ニーチェにとっては死の前に狂気が待っていたが。

Zerstich, zerbrich dies Herz!
.....
Was blickst du wieder
der Menschen—Oual nicht müde,
mit schadenfrohen Götter—Blitz—Augen?
nicht tödten willst du,
nur martern, martern? (KSt. Bd. 6, S. 398～399)

この心臓を突き刺し，突き破ってください。
.....
人間の苦悩に飽きもなさらず
不幸を楽しまれる神々の稲妻の目で，
なぜあなたはふたたび見つめられるのですか。
殺そうとはなさらず，
ただ責めて，責めるのですか。

「日が沈む」の後のにおかれた「アリアドネの嘆き」の一節であるが，死への願望が見える。ニーチェの心の中の静かなものは，激しい表現の陰に絶えず流れつづけていた。それはとりわ

け夕，Abend, Abendrot の表現をたどると，それを見いだすことができる。その最後に位置するものがこの「日が沈む」なのである[7]。

第7節には対句の表現が見いだされる。

Welle und Spiel, Sturm und Fahrt, Seele und Meer

である。

Spiel der Welle, Meer der Seele と前後の対句は考えられる。しかし，対句表現の性質から，Welle Fahrt, Spiel Sturm が結び付き，Sturm Meer, Farht Seele が結びつく。さらに真ん中の対句を取り除いてみると Welle Meer, Speil Seele という結び付きも見だされる。

この最後の関係から見ると，Spiel 戯れ，遊戯が Seele 心と結び付いてくる。„Die Sonne sinkt“ の世界で言えば1で見たような，詩的遊戯の世界，“Nur Narr! Nur Dichter!” の表現に従えば，Mit lüsternen Lefzen（みだらな唇）の戯れ Spiel の静まりとも読むことができると思う。

dass du in Urwäldern
unter buntzottigen Raubthieren
sündlich gesund und schön und bunt liefest,
mit lüsternen Lefzen,
selig-hönisch, selig-höllisch, selig-blutgierig,
raubend, schleichend, l ü g e n d liefest... (KSt. Bd. 6, S. 378)

おまえは原生林のなかで
斑の毛深い肉食の猛獣にまじり
罪深い健康に斑も鮮やかに走りまわり，
唇に淫乱を漂わせ
冷笑のよろこびに，地獄のよろこびに，血に飢えるよろこびに，
襲いかかり，忍び寄り，虚言を弄して駆けまわる

このような自虐の嵐，軌跡あるいは航海の静まりでもある。in blaue Vergessenheit, blau は Himmel の反映をしめすから，かつて心を捕らえていたものが，昼とともに消えて，ただ静かに夕べの海が眼前にひろがり，ニーチェはそれを見つめるのである。

Kahn は Schiffer＝Dichter を暗示すると同時に，その精神と仕事をも暗示している。したがって，乗り手のいない小舟のイメージは，ニーチェそのものを示している。ニーチェは自己をそ

のように見たというべきであろう。

Du möchtest schenken, wegschenken dein Überfluss (KSt. Bd. 6, S. 444)
あたえたい，あなたの充溢をあたえてあげたいと思っている。

しかし，ニーチェが生き，語りかけても，そのときにはニーチェという小船に乗るものもいなかった。ニーチェを癒すものも，まして精神も仕事も受け継ぐものもいなかったのである。

siebente Einsamkeit は Seligkeit, Heiterkeit, Vergessenheit, が音韻論的ものから関連が見られ，意味もその意味を内に含むから，der blaue Himmel と結んで，Tod 死を意味することになろう。

しかし，それ以上に天地創造のあの旧約の世界に連なる。善悪の判断を越えて，存在するものがそのものとして存在する場，あるいは生まれそして滅んで行く場を聖書の世界をかりて表現するとするならば，天地創造をも終えて神すらも憩う第七日にたとえるほかにはないにちがいない。

das Eis meiner Gipfel は現実の Alpenglühn でもあろう。G. F. Oehme (1792—1855 ドレスデン派絵画の中心的存在) に Alpenglühen という作品がある。山巓の氷雪だけが落ちかかる夕日の残光に赤く燃え，それ以外は夕べの影に包まれようとしている。ニーチェの歌ったのは典型的アルプスの夕焼けの光景と思われる。ニーチェの観念的と思われる表現には実際の自然が深い重なりを見せていることが多い。

もちろん mein という所有代名詞が使われているので，自己の作品の頂点たる „Also sprach Zarathustra“ への回顧が重ねられているであろう。しかし，それも自己とは遠く離れたものとして見るほかないのである。自虐と背中合わせの高揚からの別れでもある。

古代ギリシャでは死んだ人の魂は魚になり，将来母親であるべき人に食べられて再生すると考えられ，魚は不滅を表す[8]，という。Fisch には，精神の高揚したときの思いとは異なる，回帰への静かな思いが込められていると言えないだろうか。

Nachen : Nacht を連想させる。silber は夜を示し，34行目の gülden が示す昼と対峙されている。

さて，このようなこの詩語の輪郭を念頭に全体を見直してみよう。

1において，静謐な時の訪れに，自己を振り返りながら，昼と夜，生と死を思いながら，とりわけ第3節であるが，名詞の性を使い，面白いというべきか，悲しいというべきか，言葉の遊戯を楽しんでいるとも見える。

若いニーチェは「語 Wort とは音で表された，神経刺激の模写」と言い，「われわれドイツ人

は諸事物を性にしたがって分類し，樹木を男性とし，植物を女性として表示する。何という勝手であろう」(KSt. Bd. 1, S. 878) と言ったが，再晩年に至って，狂気を前にしてドイツ語の性を操りながら歌うニーチェである。

それは，自己に安住の許されなかったニーチェの姿のようである。ニーチェの言葉で言うならば「大いなる苦悩はかたときも休ませようとはしない」(KSt. Bd. 6, S. 409)，その苦悩に追われた果ての諧謔と見える。

そのかげにきわめてエロティックなものが潜んでいることを感じない訳に行かない。verbranntes Herz と自分を言わざるを得ないにもかかわらず，Abend に向かって Verführerblick というニーチェの姿がある。

「南ヨーロッパで人気のある卑俗性は私にはよく理解できる。ポンペイを見てまわって出会ったり，また要するにどのような古代の本を読んでも出会ったりする卑俗性と同じように，それは不愉快ではない。どうしてであろうか。そこに羞恥心が欠けている故にであろうか。どんな卑俗なものも，イタリアの歌劇やスペインの悪漢小説におけるなにか高貴なもの，愛らしいもの，情熱的なものと同じように，自信に満ち，恥じることなく登場する故にであろうか。『動物は人間と同じように権利をもっている。だから自由に走り回ってよいのだ。わが愛する人間よ，君だってやはり動物なのだ，やはり』—これがことのモラルと思えるし，南の人間性に思えるのだ。悪しき趣味と同じように権利がある。それどころか，必要性が大で，確実に満足を与え，言わば普遍語であり無条件に理解される仮面と所作であるならば，悪しき趣味は良き趣味にまさる権利をもつのである。」(KSt. Bd. 3, S. 432)

「日が沈む」を理解するためにも，また『ディオニュソス酔歌』全体を理解するためにもこの一章は重要に思われる。

このようなものが，1の3節に明らかに見て取れる。それが2に流れ込み，余韻を引きずりつつ静まり，3では死への旅立ち，さまよい出る小船と化しつつ，小船を見つめるニーチェとなり文字どおり絶唱となっていく。

『ツァラトゥストラ』のなかで「太陽は沈み行くとき，あふれんばかりの富を，黄金を，汲み尽くせない富のなかから海に撒き散らす—こうして最も貧しい漁師すら，黄金の櫂を漕ぐ。かつてこれを見て，涙が止まらなかった。」(KSt. Bd. 4, S. 249) とニーチェは言った。

夕べの美しさはニーチェにとって生の充実の反映であったのだが，もはやその生の充実の反映を自分よりはるかに遠く高い山頂の氷雪に振り返るだけで，心にも波ひとつなく，静かな死へのたゆたいを感じさせるのである。しかしながら，以前の高揚とは違った静かな回帰へのひそやかな願いが込められているようにも思われる。

4

「欠乏と無力から詩として開花する言葉の魔法の圏内での，最も純粋な詩」と E. Fink に評せられるこの詩のなかに fremdgehen, schielen, schief, halbgebrochen などを使い，die Nacht の性をあやつり，それを潜めるニーチェは，長い歴史をもつキリスト教の上に立った言語への痛烈な批判を，この詩において見せているとも言える。

聖書の天地創造第七日の余韻を詩のなかに使いながらも，「はじめに言葉ありき。……言葉は神なりき」という聖書の言葉の余韻は詩のどこにもない。

さらに，この詩がファウスト第二部11143—11150と対比させることができることを知るとき[9]，ニーチェが過去へ，言わば，帰港を拒否していたことも明らかになってくる。

Lynkus der Thürmer
durchs Sprachrohr
Die Sonne sinkt, die letzten Schiffe
Sie ziehen munter hafenein.
Ein großer Kahn ist im Begriffe
Auf dem Kanale hier zu sein.
Die bunten Wimpel wehen fröhlich,
Die starren Masten stehen bereit;
In dir preist sich der Bootsmann selig,
Dich grüßt das Glück zur höchsten Zeit.[10]

日が沈みかける。いくつかの最後の船が
元気よく港へ帰ってくる。
大きな荷舟が一隻，
運河をのぼって，こちらへ来ようとしている。
さまざまな色の旗が楽しげに風になびいて，
たのもしく帆柱がまっすぐ立っている。
ひさしぶりの舟溜りに戻って，水夫はわが身の幸福をたたえ，
めぐまれた幸運があなたに寄港の喜びを告げる[11]。

（大山定一訳）

ニーチェの「日が沈む」の詩が帰港の喜びとは全く逆の，死への静かな出港であることが一層明らかになるにちがいない。たとえ，ひそやかに回帰への願いが込められているとしても。

また「一滴の水も届かなかった」ニーチェの悲しみさえも越えた静けさをも示している。

それはニーチェの運命を暗示しているだけでなく，同時に当てもなくさ迷い出るほかはない時代の精神をも象徴しえているのである。

<テキスト>

Friedrich Nietzsche, Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe, Bd. 1-15. hrg von G. Colli und M. Montinari, W. de Gruyter, Berlin/New York, 1980（これからの引用は本文中 KSt として示す）

<参考文献>

Wolfram Groddeck: Friedrich Nietzsche „Dionysos Dithyramen“ Bd. 1, 2. W. de Gruyter, Berlin/New York, 1991

Wolfram Groddeck: Nietzsches Gedicht „Die Sonne sinkt“. Eine philologische Lektüre des sechsten Dionysos-Dithyrambus. In Nietzsche Studien Bd. 16, S. 21-46

Philip Grundlehner: The Poetry of Friedrich Nietzsche, New York/Oxford, 1986

Eugen Fink: Nietzsches Philosophie, 3 Auf. W. Kohlhammer, Stuttgart 1960

Karl Löwith: Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, W. Kohlhammer, Stuttgart 1950

秋山英夫『今はなめらかに凪いで　あるニーチェ頌』朝日出版，東京 1982

日本独文学会編『ドイツ文学』85号，1990

手塚富雄『ゲオルゲとリルケの研究』岩波書店，東京　昭和43年

アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』(山下主一郎主幹)，大修館，東京　1984

≪注≫

（1） 手塚富雄『ゲオルゲとリルケの研究』56ページ

（2） 『ドイツ文学』85号のうち薗田宗人「詩人の嘘つき—ニーチェと言語」45ページ

（3） K. Löwith: Nietzsches Philosophie der ewigen Wiederkehr des Gleichen, S. 112

（4） E. Fink: Nietzsches Philosophie, S. 180

（5） 秋山英夫『今はなめらかに凪いで』323—324ページ

（6） 『イメージ・シンボル事典』221ページ

（7） 拙稿「ニーチェにおける夕—詩人としてのニーチェ—」城西人文研究　第15巻第2号，1976，135ページ

（8） 『イメージ・シンボル事典』246ページ

（9） W. Groddeck: Nietzsches Gedichts „Die Sonne sinkt“ In Nietzsche Studien Bd. 16, S. 27

(10) Goethe Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Bd. 3, C. H. Beck, München, 1976, S. 336

(11) 『ゲーテ全集2』人文書院，京都，昭和44年，334ページ